

## 研究発表

# 自己と曼荼羅とサステイナビリティ

東洋大学 竹村牧男

## 1 サステイナビリティと共生

サステイナビリティもしくは環境問題に関する哲学・思想的な研究分野として、今日、一般的には、「環境倫理学」(Environmental Ethics)というものがある。「環境倫理学」が扱う問題は、おおよそ3点に集約されるといわれる。すなわち、

- ①自然の生存権の問題（単に人間のみならず、自然物もまた最適の生存への権利をもつ）、
- ②世代間倫理の問題（現在世代は未来世代の生存と幸福に責任をもつ）、
- ③地球全体主義（決定の基本単位は、個人ではなくて地球生態系そのものである）

の3点である（加藤尚武『環境倫理学のすすめ』、丸善ライブラリー）。

上述の、3点の中、③地球全体主義は、単なるアトミスティックな個人主義では、もはややっていけないことを示していよう。そこに、個人と自然環境ないし共同体との関係の、根本的な構造が究明されなければならない。要は、近現代を主導してきた単なる合理主義的人間観・自然観等は超克して、その無視しえないよい点は取り入れつつ（自由を認めない全体主義ではなく）、まったく新たな人間観・自然観等を自覚すべきだということである。

一方、①自然の生存権の問題は、簡単にいえば、人間と自然の共生はどうあるべきか、という問題として捉えることができよう。そのことを究明するためにも、本来、自然環境とはどのような存在なのか、人間と自然環境とはどのような関係にあるのかが追究されなければならない。

また、②世代間倫理の問題は、やはり簡単にいえば、現世代の人間と未来世代の人間はどのように共生できるか、という問題として捉えることができると思われる。ただしこのことは、すでに現世代の人々の間における抑圧や差別を克服した共生のありかたはどのように考えていくべきかとの問題と並行するものである。それは、自己にとっての他者の問題にほかならない。自己と他者（人間のいのち）とは、本来どのような存在なのか、自己は他者との関係において本来どのような構造のもとにあるのか、自他の同時的（空間的）・異時的（歴史的）共生はどうあるべきなのか、そのことが究明されていかなければならない。

とすれば、環境問題さらにはサステイナビリティの問題の所在は、①自己（人間）と自然との共生と、および②自己と他者との共生とが、どのように考えられ、本来のあるべきあり方において実現することができるのか、にあると言ってよいであろう。我々は「エコ・フィロソフィ」というものを、この2つの共生を統合するような仕方でも構想してみることができると思う。

以下、このことを、私の専門である仏教、今回は特に密教の思想に尋ねてみたい。

## 2 自己（人間）と自然との共生

空海の密教には、人間世界の環境世界も仏を本体としているとの思想が示されている。一例に、『吽字義』

には、「常遍の本仏は、損せず虧せず。汗字の実義は、汝等応に知るべし。水外に波無し、心内即ち境なり。草木に仏無くんば、波に則ち湿なけん。彼れに有って此れに無くんば、権に非ずして誰ぞ。……三諦円涉にして十世無礙なり。三種世間は、皆なこれ仏体なり。四種曼荼（大曼荼羅・法曼荼羅・三摩耶曼荼羅・羯磨曼荼羅）は、即ち是れ真仏なり。汗の実義に是の如く学すべし。……」とある。

『即身成仏義』にも、「是の如くの六大は能く一切の仏、及び一切衆生、器界等の、四主発心と三種世間とを造す」「此の如きの経文はみ皆な六大を以て能生と為し、四法身・三世間を以て所生と為す。この所生の法は上、法身に達し、下、六道に及ぶまで、粗細隔有り、大小差有りと雖も、然れども猶六大を出でず、故に仏、六大を説いて法界体性と為したもう。諸の顕教の中には四大等を以て非情とす、密教にはすなわちこれを説いて如来の三摩耶身とす。四大等心大を離れず、心色異なりと雖も、その性即ち同なり。色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。智即ち境、境即ち智、智即ち理、理即ち智、無礙自在なり。能所の二生有りと雖も、都て能所を絶せり。法爾の道理に何の造作か有らん。能所等の名は皆なこれ密号なり。常途浅略の義を執して種種の戲論をなすべからず」等とある。ここにいう六大とは、実は本不生・出過語言道・諸過得解脱・遠離於因縁・空等虚空・覺といった、仏の体性のことなのであり、それが一切の存在をなしているという。

また、『声字実相義』では、声境のみでなく五境のすべてが言語でありうることを「五大に皆な響有り、十界に言語を具す、六塵悉く文字なり、法身は是れ実相なり」と説き、そこで色境（色塵・顕色・形色・表色）が言語でありうることを、「顕形表等の色あり、内外の依正に具す、法然と随縁と有り、能く迷い亦た能く悟る」の頌（詩）で示す。ここに、法然とあるのは、すでに本来、環境は仏国土として成立していることを意味するものである。そのことを經典（『大日経』）は次のように表現している。「爾（そ）の時に大日世尊、等至三昧に入りたもう。即時に諸仏の国土地平なること掌の如し。五宝間錯し、八功德水芬馥盈満せり。無量の衆鳥あり。鴛鴦鶯鶯和雅の音を出す。時華・雜樹敷榮し間列せり。無量の樂器自然に韻に諧い、その声微妙にして人の聞かんと樂う所なり。……」

さらに、この法仏法爾の身土を、衆生の側からみたときは、次のように説かれている。「若し衆生辺に約して釈せんこと亦復た是の如し。若しは謂く、衆生に亦た本覚法身有り、仏と平等なりといわば、此の身、此の土は法然の有なるのみ。」我々凡夫の身・土も、本来は法爾の仏身・仏国土であるのが真実であるというのである。

以上、空海の思想には、人間（自己）も環境も仏を体としているという思想が見られ、そこに自然環境を人間の都合で対象的に支配・消費してよいとする考えを翻させる立場があり、それは人間と環境の共生を開くものとなるであろう。

### 3 自己と他者との共生

次に、人間と人間の共生についてであるが、即身成仏ということについて説明するものに『即身成仏義』があり、そこにはその意旨をまとめた「即身成仏頌」というものが収められている。それは次のようである。

「六大無碍にして常に瑜伽なり	四種曼荼各離れず
三密加持すれば速疾に顕わる	重重帝網なるを即身と名づく
法然に薩般若を具足して	心数心王刹塵に過ぎたり
各五智無際智を具す	円鏡力の故に実覚智なり」

この中、「三密加持速疾頭」とは、この大日如来の三密の働きによって、我々が身に印を結び、口に真言を唱え、心に三昧に住するとき、大日如来と同化せしめられ、即身成仏することを明かすものである。さらに「重重帝網名即身」とある中、重重帝網とは、帝釈天の宮殿にかかる飾りの網のことで、その網の目の一つ一つには宝石がくくりつけられており、互に映しあうとき、重重無尽に映りあう姿がそこに現前する。その様子によって、重重無尽の縁起のあり方を語るものであるが、それがなんと「即身」であるという。とすれば、あらゆる存在と重重無尽の関係にある自己が、即身成仏の中で自覚されるということであろう。今のあらゆる存在というのが、すべて主客相関のなかのそれであるとするなら、一切の他者との重重無尽の関係の中にある自己の自覚ということになるであろう。

頌の後半の部分については、もはや省略するが、それは、本来、我々の自己は、無限の覚りの智慧を有していることを歌い上げている。

また、空海の十住心思想を説く『秘蔵宝鑰』によれば、密教そのものの世界、第十秘密莊嚴心の世界を説明する箇所、一つの詩が置かれており、その中に「刹塵の渤駄はわが心の仏なり 海滴の金蓮はまたわが身なり」という句を見ることができる。国土を塵にすりつぶしたその数ほどの莫大な数の仏陀もわが心の仏であり、海の水のしずくの数ほど莫大な数の諸尊も自分自身だという。そういう他者の一切も含めて自己であることが、密教の覚りにおいては証されるというのである。それはあの「重重帝網なるを即身と名づく」とあったのと、同じ事を述べているであろう。

さらに、『秘密曼荼羅十住心論』の同じく第十住心の説明の冒頭には、次のようにある。

「秘密莊嚴心とは、すなわちこれ究竟じて自心の源底を覚知し、実のごとく自身の数量を鉦悟す。いわゆる胎藏海会の曼荼羅と、金剛界会の曼荼羅と、金剛頂十八会の曼荼羅とこれなり。かくのごとく曼荼羅に、おのおのに四種曼荼羅・四智印等あり。四種といふは、摩訶と三昧耶と達磨と羯磨とこれなり。かくのごとく四種曼荼羅、その数無量なり。刹塵も喩にあらず、海滴も何ぞ比せん。」

こうして最後の第十・秘密莊嚴心（真言宗）においては、結局、自心の究極は諸仏諸尊等の曼荼羅（輪円具足）であるとの主張が示されている。華嚴思想では一般的に事象の縁起的世界（事事無礙）が語られていたのが、この曼荼羅ではそれが諸の人格（身）の間の縁起的世界（人人無礙）として、いわば立体化されたと見ることができ、しかもその世界全体が即自己にほかならないと説くのである。かの金剛界・胎藏界の曼荼羅絵図は、自己の外の世界の様子を描いたものではなく、自己の心中の世界、あるいはむしろ自己そのものの本来の姿を描いたものだったのである。

ここに至って密教の覚りとは、自己が単に自己を超えるような、相対に対する絶対者のような大日如来と一つとなるということではなく、自己が今・ここにおいて身・語・意の三方面で優れた活動をなすかけがえのない自己（即大日如来）になるのみでなく、あらゆる他者をも自己とし、一切の他者と協働する自己として実現することなのだというべきであろう。ここに、人間と人間の共生の世界が開けそうである。

#### 4 空海の思想の可能性について

共生ということについては、人々の単なる融合・同一化をめざすものではなく、相互の個性を尊重するものであり、対立の共存でさえありうべきこと、むしろ弱者・被差別者の新たな関係の構築への希求であるべきことなのであった。その考え方は人間と自然の関係にも当然、応用されるべきで、自然もまた、汝として対することも考えてよいであろう。このような相互の尊重・協力・交流・援助等は、同時代におい

て実現していくことが喫緊の課題であるとともに、未来時代に対しても実現していくことを、鋭意、追求していくべきである。

この共生という概念をふまえつつ、私は、人間と自然および人間と人間の共生をともに統合的に追求する哲学を、エコ・フィロソフィとして具体化していきたいと思う。このことについて、空海思想には、大きな可能性があるように思われる。

上述の、自己と自然の関係および自己と他者との関係に関する空海思想をまとめれば、まず、個の身心と環境とは切り離されえず、身・心と環境とは本性（空性・仏性）において一つであり、その内容は仏のいのちそのものであること、が示されていた。

ここにおいて、さらに自他が関係し合うというとき、それは、そうしたある身・心と環境とが一つである自己が、さらにそうした無数の他の、身・心と環境とが一つである他己と渉入しあい、無限の関係を結び合っている、ということになるであろう。我々の自己は、その関係の中において成立しているのである。

曼荼羅の絵図においては、この諸仏諸尊の国土までは描かれていない。しかし、空海思想、秘密莊嚴心の世界は、まさにこのような世界であろう。そこでは、各々がかかけがえのない個であるとともに、関係する人・土の全体が自己なのである。

このとき、自他は人格的にあい対するものでなければならないが、ということは、環境におかれて生きている自己が、同じく環境におかれている他己と相対するということではなければならない。そこで他者の主体性を尊重するということは、他者が置かれている環境を損ねないあり方、むしろその環境も適正化されるあり方こそを尊重し実現することの中で、ということになるはずである。ここにおいてはじめて、自他が生き生きと自己実現していくことが可能となる。

このとき、同時代および異時代（未来世代）の見知らぬ他己（すなわち他の身・心と環境）への配慮も、当然のこととして、欠かせないものとなる。そこに、人間と自然、人間と人間の、同時的・異時的共生が、十全に展望されることになろう。

このように見たとき、独特な自己の理解を導きもたらしてくれる空海思想は、大きな意味を持つものと思われる。この本来の自己の構造の理解は、意義深い「エコ・フィロソフィ」として、サステイナビリティの実現につながるものと思うのである。